

# 作況ニュース（第3号）

水 稲

（発行：令和2年6月15日）（編集：令和2年6月12日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

## 地域間差はあるものの、生育は概ね平年並

- －目標莖数を確保したら中干しを－
- －余り苗は直ちに処分、オリゼメート粒剤の適期散布を－

### 1 今後の気象の見通し

#### (1) 東北地方1か月予報（6月13日～7月12日）【令和2年6月11日 仙台管区气象台発表】

##### <特に注意を要する事項>

1週目は気温がかなり高くなる見込みです。東北地方太平洋側では、2週目は気温がかなり低く、気温の変動が大きいです。

##### <予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。東北太平洋側は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1ヶ月の平均気温は、高い確率50%です。日照時間は、東北日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目（6月13日～6月19日）は、高い確率70%です。2週目（6月20日～6月26日）は、東北日本海側で平年並または低い確率ともに40%、東北太平洋側で低い確率50%です。

○ 次回の予報発表予定： 1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 6月24日(水) 14時

【季節予報】

[http://www.jma.go.jp/jp/longfcst/102\\_00.html](http://www.jma.go.jp/jp/longfcst/102_00.html)

## 2 県内の概況

### (1) 天候の特徴

【秋田地方気象台】

5月下旬： この期間、旬の前半は低気圧や気圧の谷、前線の影響で曇りや雨となつた日が多かった。旬の後半は高気圧に覆われ、晴れた日が多く、31日には横手など5地点で真夏日となった。

旬平均気温は、概ね平年並から高い。旬降水量は、少ないから平年並。旬間日照時間は、概ね平年並から多い。

6月上旬： この期間、前半は低気圧や気圧の谷の影響で曇りや雨の日があつたが、高気圧に覆われ晴れて気温が高い日が多かった。

旬平均気温は、かなり高いから高い。旬降水量は、少ないから平年並、内陸南部でかなり少ない所もあつた。旬間日照時間は、概ねかなり多い。

[旬統計値 (秋田)]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (hr)	平年比 (%)	階級区分
5月下旬	16.5	+0.5	平年並	29.0	75	平年並	76.6	111	平年並
6月上旬	20.1	+2.1	かなり高い	27.0	111	平年並	99.6	153	かなり多い

### (2) 本田の生育

#### 1) 移植栽培

各地域振興局による定点調査(6月10日)では、あきたこまち(県内64地点)は、草丈25.7cm(平年比102%)、茎数159本/m<sup>2</sup>(同103%)、葉数6.2葉(平年差+0.2葉)であった。ひとめぼれ(6地点)は、草丈26.7cm(平年比99%)、茎数259本/m<sup>2</sup>(同111%)、葉数6.6葉(平年差+0.1葉)であった(表-1)。

あきたこまちの平均の移植日は平年より1日早い5月20日で、葉数は平年並からやや多く、草丈、茎数は地点差が大きい状況であった。ひとめぼれの移植日は平年より1日早い5月16日で、草丈および葉数は平年並、茎数は多かった。

表-1 定点調査結果(6月10日調査)

品種	地区	草丈			m <sup>2</sup> 当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
あきたこまち	県北	26.9	97	102	187	91	103	6.4	-0.2	0.1
	中央	24.7	96	97	151	85	93	6.4	-0.2	0.1
	県南	25.2	100	105	140	87	109	6.0	-0.3	0.3
	全県	25.7	98	102	159	88	103	6.2	-0.3	0.2
ひとめぼれ	中央	26.7	94	99	259	95	111	6.6	-0.2	0.1

※平年値:平成22年~令和元年までの過去10年平均

表－2 気象感応試験の生育状況（あきたこまち、6月10日調査）

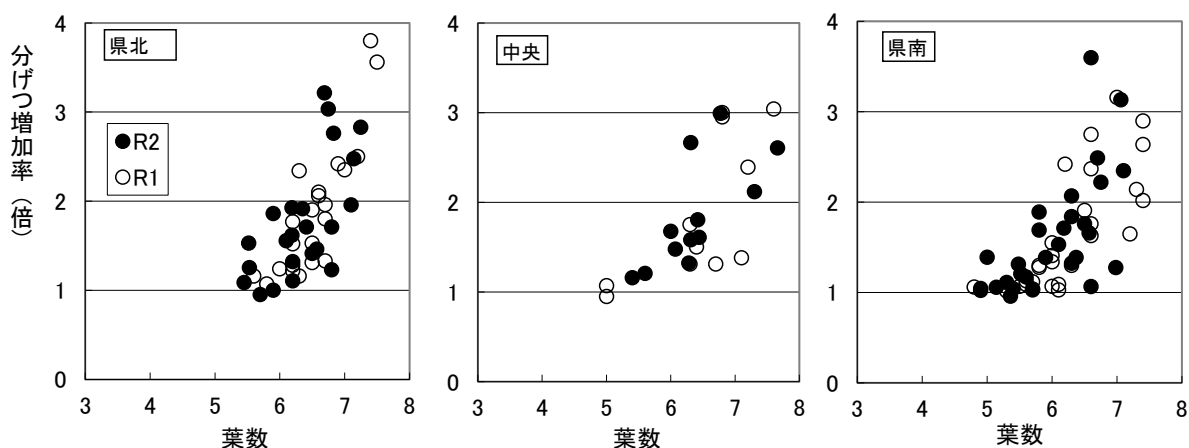
試験地	移植日	草丈			㎡当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
農試(標植)	5月15日	25.9	100	106	248	81	115	7.6	-0.4	0.7
農試(晩植)	5月25日	24.7	100	96	133	96	108	6.1	-0.6	0.2

注. 平年値は、標植は平成12～令和元年、晩植は平成29～令和元年の平均値を用いた。

農試（標植）では、草丈は25.9cm（平年比106%）、㎡当たり茎数は248本（同115%）、葉数は7.6葉（平年差+0.7葉）であった。

農試（晩植）では、草丈は24.7cm（平年比96%）、㎡当たり茎数は133本（平年比108%）、葉数は6.1葉（前年差+0.2葉）であった。

5月下旬以降6月2半旬までの気温が高く、日照時間が多かったことから、5月15日移植の農試（標植）は、いずれの項目も平年を上回った。5月25日移植の農試（晩植）は、茎数は平年より多く、葉数は平年並だった。



図－1 葉数と分けつ増加率（あきたこまち、6月10日定点調査）

$$\text{分けつ増加率} = \text{茎数} / \text{植え付け本数}$$

（注：中苗の場合、主稈第6葉伸展中（5.1～6.0葉）に3号分けつ（以下3号）、主稈第7葉伸展中（6.1～7.0葉）に4号分けつ（以下4号）が発生。植え込み本数に対して3号のみが完全に発生した場合、分けつ増加率は2。さらに4号が完全に発生した場合の分けつ増加率は3。）

定点調査ほ場のあきたこまちの葉数と分けつ増加率は、前年と比べて県北地域では葉数の進展は同等からやや遅れ、分けつ増加率が3を超えた地点は少ない。中央・県南地域は葉数の進展は同等で、分けつ増加率はやや低く、2に達していない地点が多い。全县を通じて初期分けつの発生は少ないとみられる。

6葉までの期間中に増加率が2に達しない地点では、1次分けつ3号の発生は抑制されていると考えられる。初期分けつの少ないほ場では、水の入替え等による土壌還元対策と浅水管理による分けつの確保を行う。また、目標茎数の確保後は中干しを行う。

## 2) 直播栽培

6月10日現在の定点の生育概況は、湛水直播のあきたこまちでは、全県平均で苗立率60%、苗立数79本/m<sup>2</sup>、草丈15.0cm、茎数117本/m<sup>2</sup>、葉数4.2葉であり、平年に比べ、苗立数、茎数は少なく、草丈は短く、葉数は平年並となっている(表-3)。

表-3 定点調査結果(湛水土中条播:品種 あきたこまち、各地域振興局6月10日調査)

設置場所	播種月日 (月/日)	出芽率(%)		苗立率 (%)	苗立数			草丈			m <sup>2</sup> 当たり茎数			葉数		
		播種 10日後	播種 20日後		本年 (本/m <sup>2</sup> )	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差	平年差
農試	5/11	12	49	49	62	56	76	16.2	88	100	117	40	86	4.3	-1.0	0.1
大館市	5/17	45	67	67	111	77	109	16.5	104	99	206	103	138	4.3	0.3	0.3
井川町	5/12	0	51	60	81	77	82	14.8	82	89	89	29	58	4.9	-0.8	0.6
美郷町	5/13	49	55	55	59	96	78	17.3	99	98	84	48	63	4.3	-1.3	-0.4
横手市	5/17	55	69	69	83	91	84	10.3	63	70	87	94	64	3.3	-0.2	-0.4
全県	5/14	32	58	60	79	79	86	15.0	87	91	117	63	82	4.2	-0.6	0.0

\*農試:出芽率・苗立率(%)=出芽数・苗立数/播種粒数(実測値)×100

その他地点:出芽率・苗立率(%)=出芽数・苗立数/播種粒数(播種量からの推定)×100

## (3) 病害虫の発生概況

### 1) 斑点米カメムシ類

6月2半旬までの牧草地すくい取り調査(北秋田市、秋田市、大仙市)において、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代成虫は大仙市で確認されており、発生時期はやや遅い。アサスジカスミカメの越冬世代成虫は大仙市で確認されており、発生時期はやや早い。

## 3 当面の技術対策(6月中旬~下旬)

5月下旬から気温が高い日が続いて日照時間が多い。葉数の展開が進み茎数が多いほ場も多くあるが、移植時の低温やその後の高温による傷みが目立ち、分けつ発生が遅れているほ場もある。今後は茎数を確保するための重要な時期であることから、各ほ場の生育状況に応じたきめ細かな栽培管理を行う。

### (1) 水管理

- 1) 気温が高く経過していることから、還元しやすい土壌では、短期間の落水や水の入れ替えにより異常な還元を防止する。
- 2) 分けつ発生が少なく、茎数が足りない場合は、浅水管理を徹底して分けつの発生を促進する。また、水温と地温を高めて日較差を大きくするため、かん水は水温の低い早朝に短時間で行う。中苗の移植栽培では第3号から第6号までの1次分けつ、直播栽培では第1号から第4号までの1次分けつを確保する。
- 3) 目標茎数を確保したら、中干しで分けつを抑制する。

### (2) いもち病予防のため余り苗は直ちに処分

余り苗で発生したいもち病は、周辺ほ場への強力な伝染源となるため、余り苗は土中に埋めるなどして直ちに処分する。

### **(3) オリゼメート粒剤は適期に散布**

移植栽培での葉いもちの全般発生開始期は平年では7月2半旬であるが、全般発生開始期が早まると葉いもちや穂いもちが多くなる傾向がある。オリゼメート粒剤は初期の発病を抑えることで葉いもちの発生量を少なくするので、側条施用剤や箱施用剤を施用していない場合は、6月15日頃（6月12～18日）に10a当たり2kg散布する。

直播栽培では移植栽培に比べて葉いもちの初発が遅れるため、播種時に防除剤を施用していない場合は、オリゼメート粒剤を6月23日頃（6月20～25日）に10a当たり2kg散布する。

### **(4) 初期害虫の防除**

6月に移植したほ場や直播栽培では生育量が小さいため、イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）、イネミズゾウムシ等の初期害虫による食害がイネの生育を抑制することがある。害虫の発生状況をよく観察し、防除を実施する。

（令和2年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準p.31～35、43参照）

### **(5) 斑点米カメムシ類の増殖を抑える雑草管理**

主要加害種であるアカスジカスミカメは、水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し増殖するため、上記（6）を参照し水田内の除草に努める。

また、農道・畦畔などのイネ科雑草でも増殖することから、農道・畦畔や法面、休耕田等の雑草地は、地域でまとまって一斉に除草し、斑点米カメムシ類の密度低下を図る。

（防除基準p.38～39参照）

### **(6) 表層剥離・藻類等の防除**

表層剥離やアオミドロ等の発生が多くなると地温や水温が低下し、生育が抑制されるので適切な対策を講ずる。対策としては、気温の低い早朝や雨の日の水の入れ替えを基本とする。移植栽培では、水管理で十分な効果が見られない場合は、中耕機による攪拌やモゲトン粒剤を散布する。

## (7) 中・後期除草剤の適正使用

中・後期剤の使用にあたっては、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、それぞれの雑草に除草効果の高い剤を選択する。また、十分に湛水ができないほ場では水面施用除草剤の十分な効果が得られない。用水確保が難しいほ場では茎葉散布剤の使用などほ場条件に合わせて防除する。

### 1) 移植栽培

- ①ノビエのみ見られる場合は、ヒエクリーン1キロ粒剤／ワンステージ1キロ粒剤、ヒエクッパエース1キロ粒剤／スケダチエース1キロ粒剤、クリンチャー剤のいずれかを散布する。ヒエクリーン1キロ粒剤／ワンステージ1キロ粒剤、ヒエクッパエース1キロ粒剤／スケダチエース1キロ粒剤の使用時期はノビエ4葉期までだが、効果発現に日数を多く要するので早めに散布する。クリンチャー剤は粒剤、ジャンボ剤、液剤によって使用時期や使用量が異なる。また、クリンチャー剤は散布後に発生したノビエには効果がない。
- ②ノビエ及びその他の難防除雑草が見られる場合は、アトトリ豆つぶ250、レブラス1キロ粒剤、クリンチャーバスME液剤、ワイドアタックSC、フォローアップ1キロ粒剤／ワイドアタックD1キロ粒剤で対応する。  
(防除基準p. 308～310を参照)

### 2) 直播栽培

- ①ノビエのみ見られる場合は、クリンチャー剤、ヒエクリーン1キロ粒剤／ワンステージ1キロ粒剤のいずれかを散布する。
- ②ノビエ以外の難防除雑草（ホタルイ類、コナギ、オモダカ等）が主に見られる場合は、バサグラン液剤を散布する。
- ③ノビエ及び難防除雑草が見られる場合は、マメットSM1キロ粒剤、ザーベックスDX1キロ粒剤、クリンチャーバスME液剤、ワイドアタックSCを散布する。  
(防除基準P 315～318、P325～326を参照)

## (8) ばか苗病の早期発見と早期処分

採種ほ周辺ほ場では、ばか苗病を発見したら直ちに株ごと土中に埋めて処分する。発病株の処分は遅くとも6月末までに終了する。

## (9) アワヨトウの飛来

長距離移動性害虫であるアワヨトウ成虫の飛来が5月6半旬に確認されており、今後の発生に注意する。

第1世代幼虫は6月中旬以降にイネ科牧草、とうもろこし、小麦等のイネ科作物に被害を及ぼすと予想されるが、水稻では休耕田等からの幼虫の移動・加害に注意する。

## (10) 農薬の飛散・流出防止の徹底

農薬を散布する場合は、周辺作物への飛散防止対策の一層の徹底を図る。

また、除草剤や水面施用剤の散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

【時期別・主要作業別指導事項】

月旬	作業の種類	主な指導事項
6月中旬 ～ 6月下旬	水管理	○浅水管理の徹底により分けつの確保に努める。 ○かん水は早朝に行い、短時間で終えるようにする。 ○目標茎数を確保したら、中干しまたは深水処理で分けつを抑制する。 ○落水しにくいほ場や異常還元ほ場では、中干しに併せて溝切り等を行い、排水を図る。
	表層剥離・藻類等の防除	○水の入替え等に対応する。 ○移植栽培では必要に応じて中耕機による攪拌やモゲトン粒剤を散布する。
	余り苗の処分	○余り苗にいもち病が発生すると、強力な伝染源となるので、余り苗は、直ちに土中へ埋め込んで処分する。
	直播水稻の追肥	○苗立数が60本/㎡以下の場合は、5葉期までに10a当たり窒素成分で2kg以下の追肥を行う。
	中・後期除草剤の適正使用	○湛水管理が難しい場合は、茎葉散布剤で防除する。 ○ノビエが見られる場合は、ヒエクリーン1キロ粒剤/ワンステージ1キロ粒剤、ヒエクッパエース1キロ粒剤/スケダチエース1キロ粒剤、クリンチャー剤のいずれかを散布する。 ○ノビエ及びその他の難防除雑草が見られる場合は、レプラス1キロ粒剤、クリンチャーバスME液剤、ワイドアタックSC等に対応する。
	葉いもち防除	○移植栽培で側条施用剤や箱施用剤を施用していない場合は、オリゼメート粒剤を遅くとも6月18日までに10a当たり2kg散布する。 ○直播栽培で播種時に側条施用剤を施用していない場合は、オリゼメート粒剤を6月23日頃（6月20～25日）に10a当たり2kg散布する。
	初期害虫の防除	○6月に移植したほ場や直播栽培では生育量が小さく、イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）やイネミズゾウムシの食害がイネの生育を抑制することがある。害虫の発生状況をよく観察し、防除を実施する。
	ばか苗病の対策	○採種ほ周辺ほ場では、ばか苗病を発見したら直ちに株ごと抜き取って土中に埋めて処分する。 ○発病株の処分は遅くとも6月末までに終了する。
	畦畔等雑草の管理	○斑点米カメムシ類の増殖を抑える（密度低下）ため、雑草管理は地域でまとまって行う。
農薬飛散・流出防止	○農薬を散布する場合は、周辺作物への飛散防止対策の一層の徹底を図る。また、除草剤や水面施用剤の散布後7日間は落水、かけ流しをしない。	

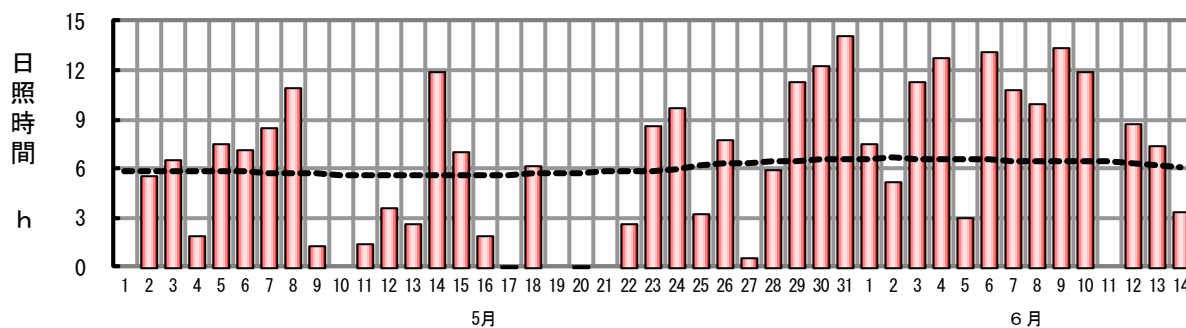
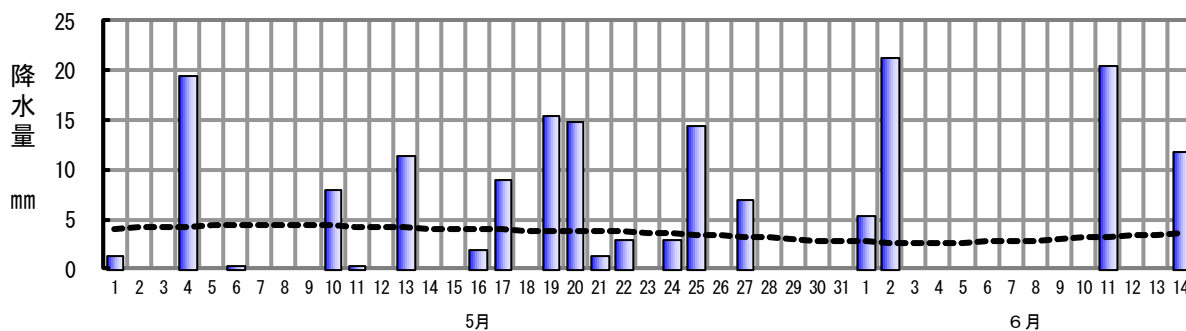
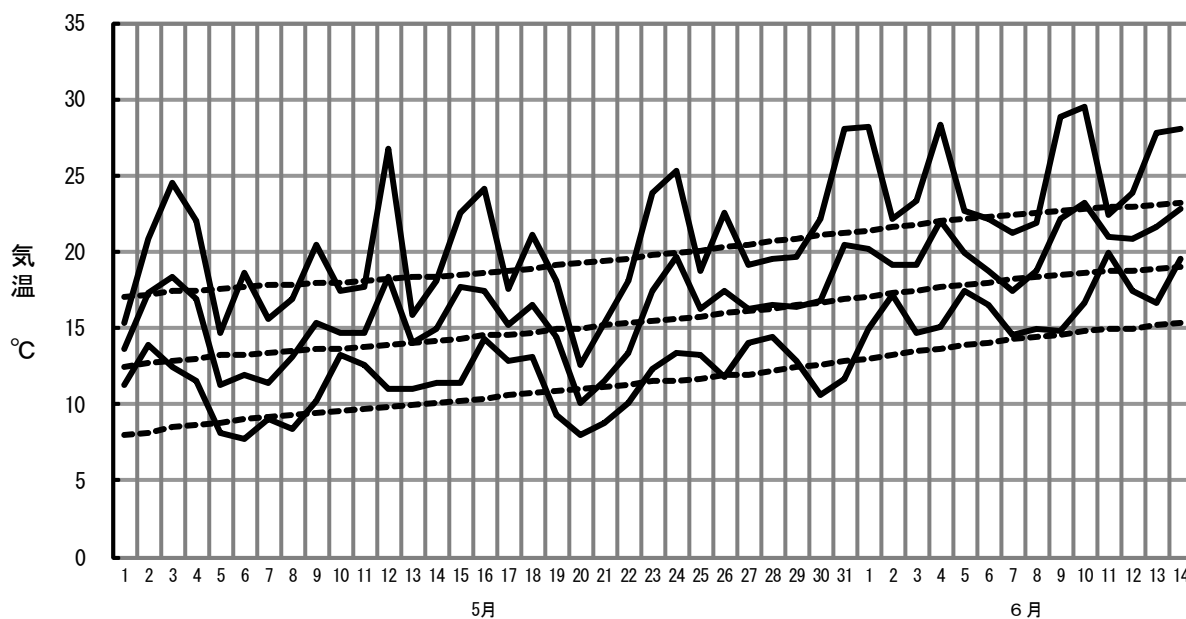
# 資 料 編



# 1 気象経過

(1) 令和2年5月1日から6月14日の気象経過図(観測地点：秋田地方気象台)

(資料 秋田地方気象台)



**(2) 旬別気象状況 (秋田市)**

(資料 秋田地方気象台)

項目 \ 時期	5月上旬		5月中旬		5月下旬		5月計	
	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較
平均気温(℃)	14.4	+1.1	15.3	+0.9	16.5	+0.5	15.5	+0.9
降水量(mm)	29.5	69%	53.5	129%	29.0	75%	112.0	91%
日照時間(h)	49.7	86%	35.3	64%	76.6	111%	161.6	89%

項目 \ 時期	6月上旬	
	本年	平年比較
平均気温(℃)	20.1	+2.1
降水量(mm)	27.0	111%
日照時間(h)	99.6	153%

**2 農作業進捗調査結果 (各地域振興局調査)**

区分	地域	始期 (5%)			盛期 (50%)			終期 (95%)		
		本年	前年	平年	本年	前年	平年	本年	前年	平年
田植作業	県北	5/15	5/13	5/15	5/23	5/21	5/22	5/30	5/28	5/28
	中央	5/11	5/9	5/11	5/19	5/19	5/19	5/29	5/30	5/29
	県南	5/17	5/17	5/18	5/24	5/24	5/24	5/31	5/31	5/31
	全県	5/13	5/12	5/13	5/23	5/22	5/22	5/30	5/30	5/30

### 3 水稻定点調査結果（各地域振興局6月10日調査）

表－1 定点調査結果(品種:あきたこまち)

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
鹿角	5	27.6	100	106	228	121	123	6.4	0.1	0.2
北秋田	9	26.5	92	98	208	97	100	6.4	-0.4	0.0
山本	9	26.9	100	105	143	69	94	6.3	-0.3	0.2
秋田	10	24.9	95	96	155	83	90	6.5	-0.3	0.0
由利	2	23.9	107	104	134	106	114	5.8	0.1	0.3
仙北	10	26.1	99	106	147	65	95	6.1	-0.5	0.3
平鹿	11	24.1	101	105	119	105	107	5.6	-0.4	0.0
雄勝	8	25.5	98	104	161	111	138	6.4	0.0	0.6
全県平均	64	25.7	98	102	159	88	103	6.2	-0.3	0.2
6月10日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	24	23	26	159	140	179	6.2	5.9	6.4
	中央	25	23	27	174	145	204	6.3	6.0	6.6
	県南	24	23	25	125	113	138	5.8	5.6	6.0

表－2 定点調査結果(品種:ひとめぼれ)

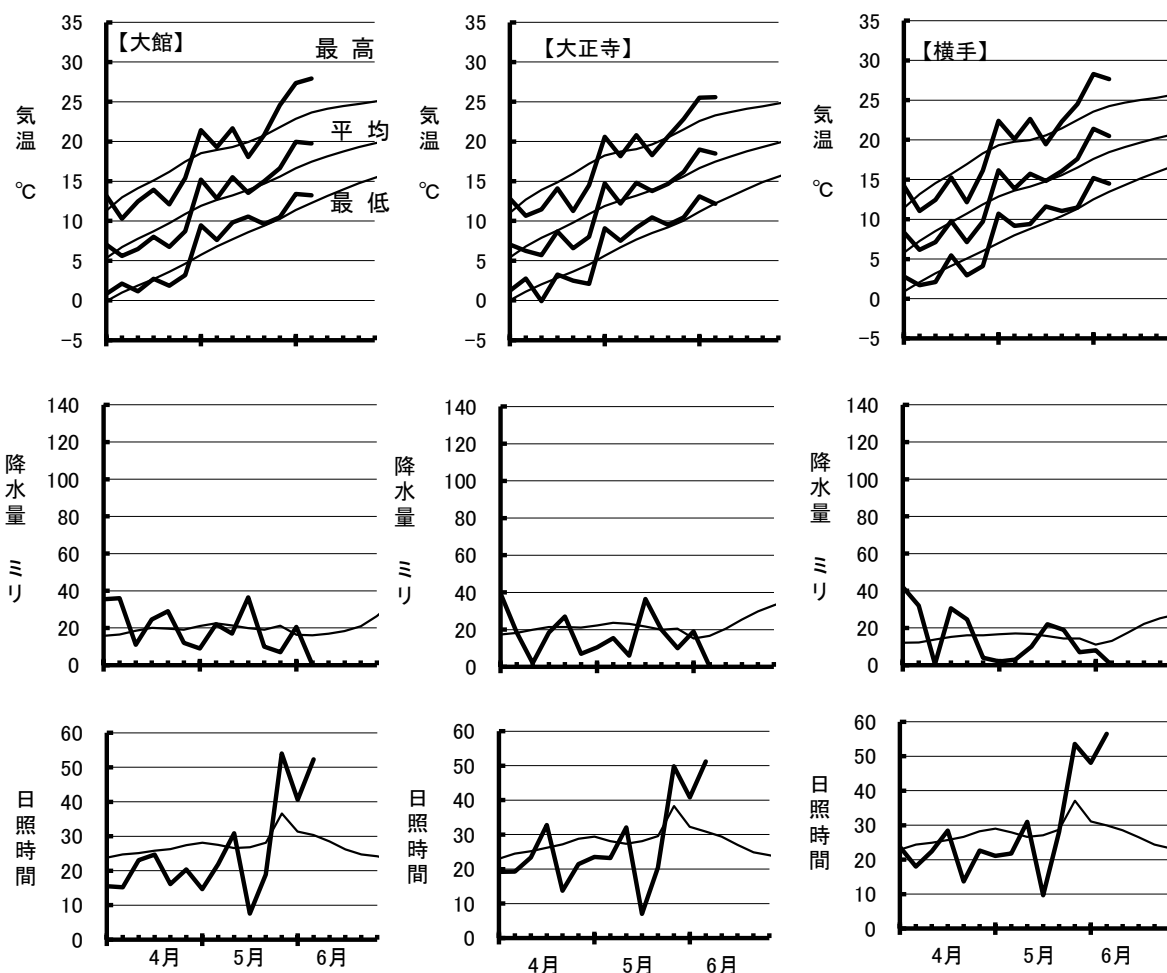
地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
秋田	2	25.2	96	102	270	100	129	6.5	0.3	0.4
由利	4	27.4	93	98	254	92	104	6.7	-0.4	0.1
中央地区平均	6	26.7	94	99	259	95	111	6.6	-0.2	0.1

## 4 関連成績

### (1) 気象感応試験（あきたこまち）

#### 1) 稲作期間の気象（5月下旬以降）

5月下旬以降も晴れの日が多く、平年に比べ最高気温、平均気温、最低気温は高い～かなり高かった。降水量は6月1半旬を除いて少なかった。日照時間は期間を通じてかなり多かった。



図－1 令和2年の稲作期間中の気象推移（アメダスデータ）

#### 2) 生育概況

表－3 気象感応試験の生育状況（6月10日調査）

試験地	移植日	草丈			㎡当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
農試(標植)	5月15日	25.9	100	106	248	81	115	7.6	-0.4	0.7
農試(晩植)	5月25日	24.7	100	96	133	96	108	6.1	-0.6	0.2

注. 平年値は、標植は平成12～令和元年、晩植は平成29～令和元年の平均値を用いた。

農試（標植）では、草丈は25.9cm（平年比106%）、㎡当たり茎数は248本（同115%）、葉数は7.6葉（平年差+0.7葉）であった。

農試（晩植）では、草丈は24.7cm（平年比96%）、㎡当たり茎数は133本（平年比108%）、葉数は6.1葉（平年差+0.2葉）であった。

表－4 農業試験場の出葉状況(気象感応試験)

品種	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
あきたこまち (標植)	R2	5/23	5/28	6/2	6/8					
	R1	5/20	5/24	5/29	6/4	6/11	6/19	6/27	7/9	7/18
	平年	5/24	5/30	6/5	6/11	6/17	6/23	7/2	7/12	7/19
	平年差	-1	-2	-3	-3					
あきたこまち (晩植)	R2	6/1	6/5	6/10						
	R1	5/29	6/3	6/7	6/13	6/20	6/24	7/1	7/10	7/19
	平年	5/30	6/5	6/11	6/17	6/23	6/29	7/6	7/14	7/22
	平年差	2	0	-1						

注：標植の平年値は、平成12～令和元年までの平均。晩植の平年値は、平成29～令和元年までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.5葉。

R2年の移植日と移植時葉数は標植5月15日、3.7葉、晩植5月25日、3.4葉

標植の出葉期は、7葉期、8葉期は平年に比べて3日早かった。

晩植の出葉期は、7葉期までほぼ平年並で推移している。

### 3) 分けつの発生状況(6月10日調査)

農試(標植)(5月15日移植)における、分けつの初発生は5月31日で平年並だった(図-2)。日照時間が多く、葉齢進展が早まり、6月10日の10個体当たりの累積分けつ本数は26本で、平年の18本に比べて多かった。10個体当たりの1次分けつの発生状況では、主稈葉数が7.6葉(表-3)で、2号が0本(平年値2本)、3号が5本(同6本)、4号が10本(同9本)、5号が10本(同10本)となった(表-5)。6月の高温により分けつ発生が早くなっている。

農試(晩植)(5月25日移植)では、分けつの初発生は6月5日で、平年並だった(図-3)。主稈葉数6.1葉(表-3)で、1次分けつは2号が0本(平年値4本)、3号が8本(平年値5本)、4号が3本(平年値10本)となった。

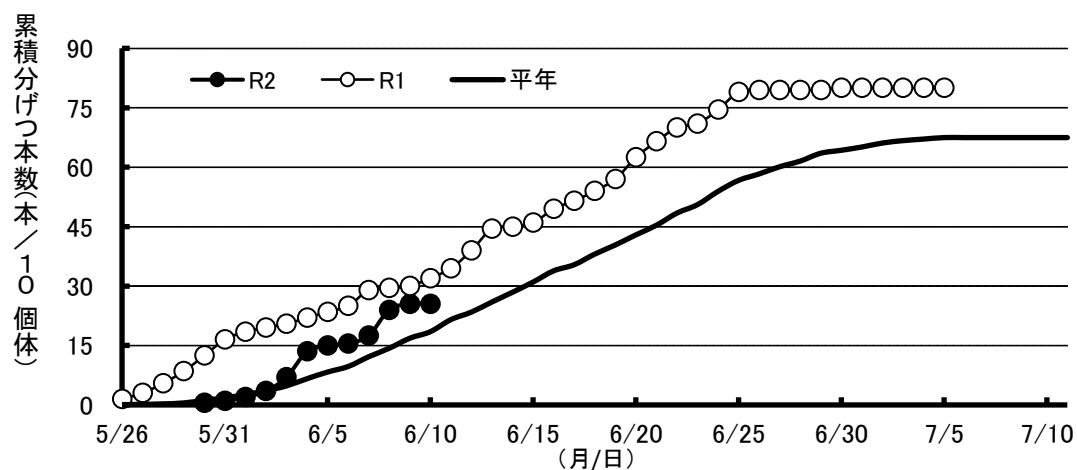


図-2 農試(標植)の分けつの発生推移(中苗・あきたこまち、5月15日移植、10個体合計)

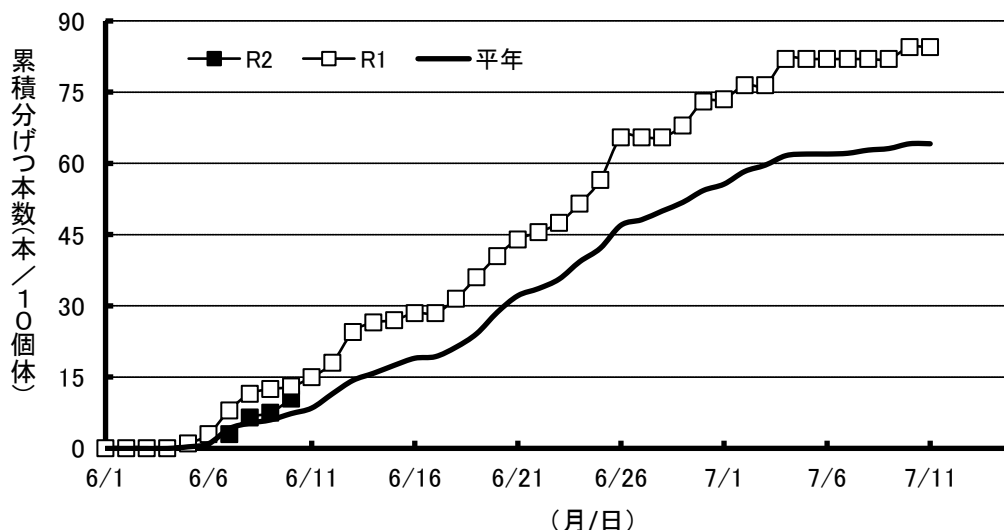


図-3 農試(晩植)の分けつの発生推移(中苗・あきたこまち、5月25日移植、10個体合計)

表-5 10個体当たりの分けつ発生数(標植は5月15日、晩植は5月25日移植、6月10日調査)

試験地	1次分けつ						2次分けつ		分けつ 合計
	1号	2号	3号	4号	5号	6号	2号	3号	
農試(標植)	1	0	5	10	10	—	—	—	26
農試(晩植)	0	0	8	3	—	—	—	—	11

ラウンドの関係により分けつそれぞれの計と合計は必ずしも一致しない。

#### 4) 土壌残存窒素量

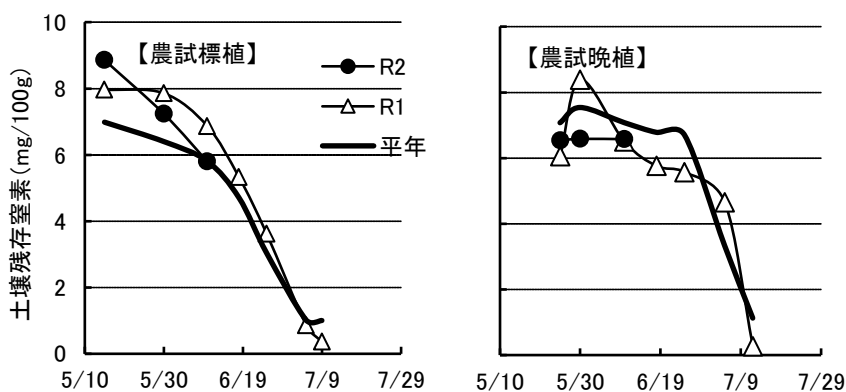


図-4 土壌残存窒素量の消長

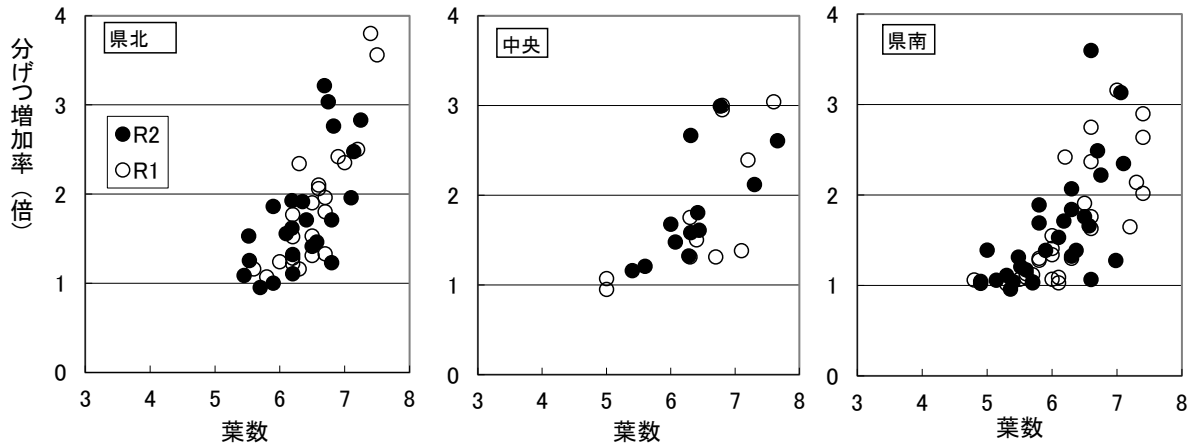
注：移植日：農試(標植) 5月15日、農試(晩植) 5月25日

基肥量：N 0.7kg/a

平年値：農試(標植)は平成12～令和元年、農試(晩植)は平成29～令和元年の平均値

6月10日の土壌残存窒素量は、農試(標植)は5.8mg/100gで前年より少なく、平年並だった。農試(晩植)は6.6mg/100gで前年並で平年より少なかった。

## 5) 定点（あきたこまち）の生育状況

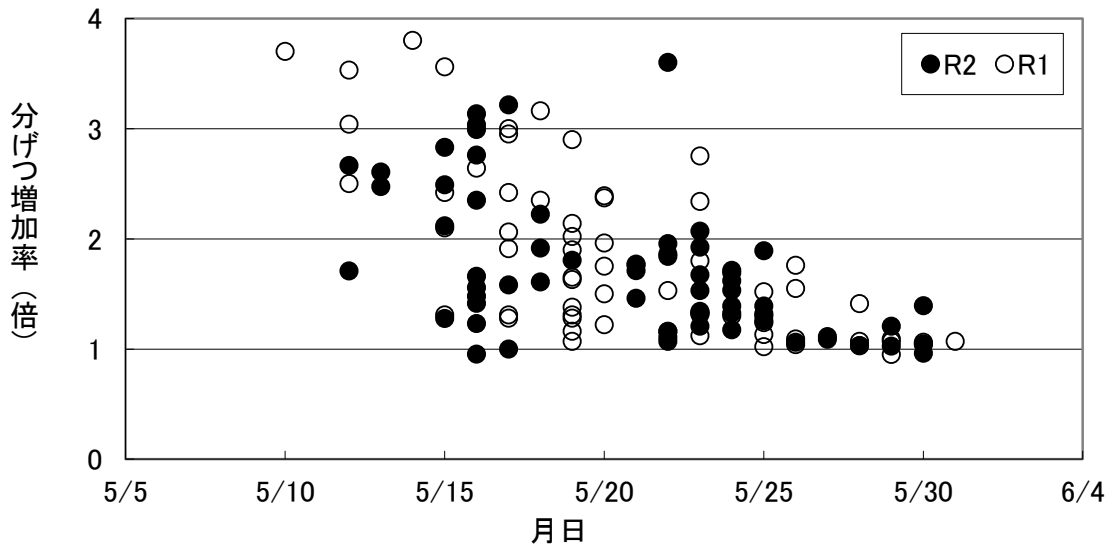


図－5 葉数と分げつ増加率（あきたこまち、6月10日定点調査）

$$\text{分げつ増加率} = \text{茎数} / \text{植え付け本数}$$

（注：中苗の場合、主稈第6葉伸展中（5.1～6.0葉）に3号分げつ（以下3号）、主稈第7葉伸展中（6.1～7.0葉）に4号分げつ（以下4号）が発生。植え込み本数に対して3号のみが完全に発生した場合、分げつ増加率は2。さらに4号が完全に発生した場合の分げつ増加率は3。）

定点調査ほ場のあきたこまちの葉数と分げつ増加率は、前年と比べて県北地域では葉数の進展は同等からやや遅れ、分げつ増加率が3を超えた地点は少ない。中央・県南地域は葉数の進展は同等で、分げつ増加率はやや低く、2に達していない地点が多い。



図－6 田植え日と分げつ増加率（あきたこまち、6月10日定点調査）

定点調査ほ場のあきたこまちの田植え日と分げつ増加率は、前年と比較して早い時期の田植えで分げつ増加率が低い。特に5月15～17日で分げつ増加率が2に達しない地点が多い。5月25日以降の田植えにおいても、分げつ増加率は低い傾向である。

## (2) 直播作況試験

### 1) 直播水稻の出芽・苗立

農業試験場の播種粒数は124粒/m<sup>2</sup>（平年140粒/m<sup>2</sup>）であった。苗立率は49%で、前年差-41ポイント、平年差-10ポイントと前年及び平年を下回った。苗立数は62本/m<sup>2</sup>となり前年及び平年を下回った（表-6）。

本年は、播種後10日間の平均気温は平年並であったが、播種後から断続的な降雨があり十分な落水管理にならなかったことと、5月4半旬の低温により出芽は緩慢であった。そのため、苗立率および苗立数は平年を下回った（図-7、8、9）。

播種後、出芽率10%に達した日までは10日（平年差+3日）、播種から出芽揃期（苗立数の90%が出芽した日）までは15日（同+2日）とそれぞれ遅かった。

表-6 農試直播作柄解析ほ場の苗立(あきたこまち、湛水土中条播、6月10日調査)

播種 月日	苗立率			m <sup>2</sup> 当たり苗立数		
	本年 (%)	前年差	平年差	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)
5/11	49	-41	-10	62	56	76

注) 平年値：過去10年間（H22～R1）の平均値

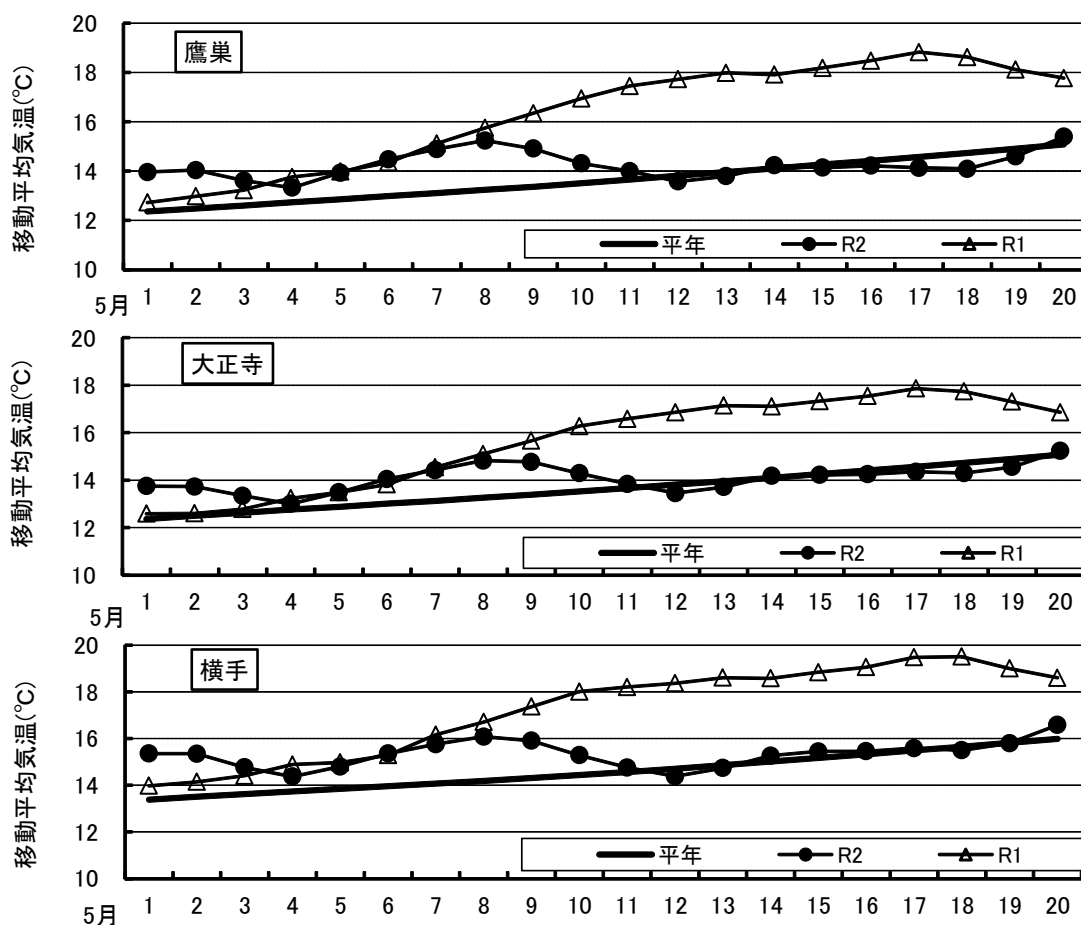


図-7 播種日と翌日から10日間の移動平均気温(アメダスデータ)



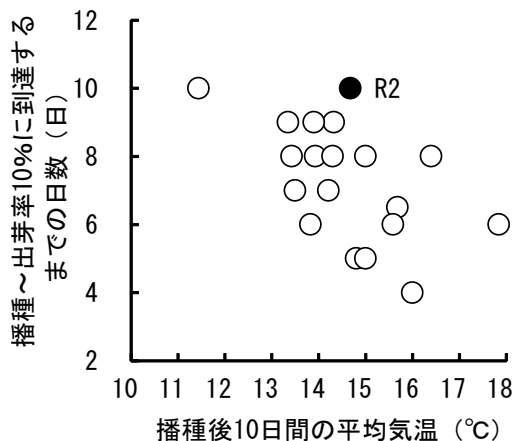


図-8 播種後10日間の平均気温と  
出芽率の関係(H14~R2年)

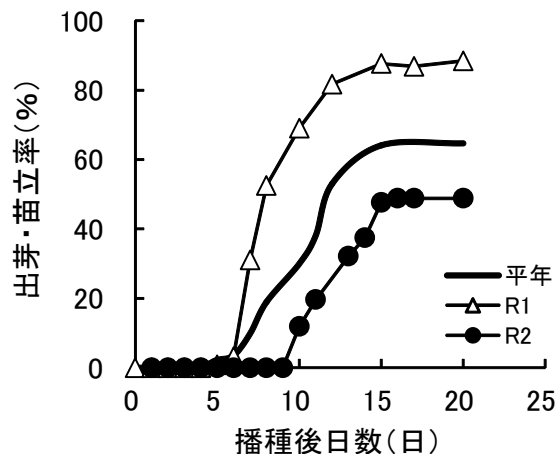


図-9 出芽・苗立率の推移

注) 平年値：過去10年間(H22~R1年)の平均値

## 2) 直播水稻の生育概況 (6月10日現在)

6月10日調査の生育状況は、草丈16.2cm(平年比100%)、 $m^2$ 当たり茎数は117本(平年比86%)、葉数は4.3葉(平年差+0.1葉)であった(表-7)。

本年の農業試験場における直播水稻の生育は、草丈、葉数は平年並であるが、苗立数が少なかったことにより、平年に比べ茎数は少なくなっている。

表-7 農試直播作況ほ場の生育概況

(あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種、6月10日調査)

草 丈			$m^2$ 当たり茎数			茎数増加比			葉 数		
本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年差	平年差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
16.2	88	100	117	40	86	1.9	-0.7	0.3	4.3	-1.0	0.1

注1) 平年値：過去10年間(H22~R1)の平均値

注2) 茎数増加比=茎数/苗立数

## 各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

### 記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

TEL 018-881-3330

作物部

内線(422・423・424)

生産環境部

内線(306・310)

秋田県病害虫防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方気象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点 統計チーム

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課 (農産・複合推進班)

TEL 018-860-1786

園芸振興課 (調整・普及班)

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は6月30日(火)の予定です】